

さうだ さうして私が可愛がつてやつても嬉しがつてはいけないよ

世間の口がうるさいからね

お前は何をそんなに怒つてゐる 私が斯う云つてお前を叱つたのを侮辱されたと思つて口惜しがつてゐるのだね ホ、、、

さうだ、口惜しがつて地團駄踏んで怒つてゐる なんとまあ可愛ではないか お怒りたんとお怒り これでも武士です そんな愚

劣な動物ぢやありませんか ホ、、、

ほんとに真紅になつて怒つて居る あの立派な體を宮殿の大理石の上に叩きつけてゐるやうだ えつ

そして怒りにまかせて打つたいたみが全身に鳴り響いた時私の本當の心があつた若い騎士に知れやしないかしらん えつ まあ何としよう

世間の口より 何物よりも私にはこれが一番怖ろしいのだ 私の本當の心が 眞實の囁きが 母の胎内から持つて來て そつと墓場に持つて歸る 私もはつきり知らない心の響があつた若い騎士の胸に悟られたら えつ まあ何としよう

おかくれになつた二位様

一

お前さまとわたし 何といふ縁でしたらう
思ひがけない事を實家から知らせて來た時位
死といふものを直接に感じた事はありませんでした
今年九十に近かいお年に何の不足もありませんまいが
それでも私はお前様ばかりは
死の運命を持たぬお人の様に思つてゐました

二

靜かに更けて音もなければ
今も聞ゆる四つの緒に
奏らべ合はする笙の笛
わからない譜を手拍子うつて唱ふて御座るおまへさま
武内宿禰を見るやうな氣高い二位様

三

軒の玉垂ことごとと胸にひびいて
美しう雨のふる夜の物語
増鏡や源氏物語みんな虚ではありませぬ

それはおまへさま身みづから見て来た
繪卷のやうな虚の様な
ほんとの話をいひ聞かされましたもの

四

幼くて花のやうなお稚子さんは
大すけの局のお部屋子
美しくお化粧して
縫の振袖長絹の袴
何代目かの紫式部や赤染衛門
その人々が今在はしたら百何十といふお年

五

それはつい昨日の出来事のやうに
ふとしたものつまはつれまで覚えてゐてはお話なさる
前世紀からとり残されて世界はまるで異つても
清凉殿の御宴の舞や
關白様をお忘れなさらぬ
おまへ様一人は取り残されて

六

西京の街にあわただしう入り込んだ薩摩隼人の士たち
紫袴の美しい若殿様に道問へば

我は上人餘人にとへ
おかね上つたお口づから
ただこれだけのお答へも
誠に我は上人と今も昔とおぼしめす

七

稚子鬻ならばわしが上手やと
私の髪をいぢろとなさる
男の人に髪いうてもらうたらお友達に笑はれまする
いやぢやというて逃げまはつた
櫛も簪も後に挿すものやと云はれて

門を出る時そつと袂にかくしました

八

花と紅葉の色は昔に異らねど移る世の様御存じなく可愛いむかし
のお稚子さんは冬の寒いにお足袋を召さず
上の情けに畏多けれど片片のみを許されて忝けなさに泣いたもの
今の若は不作法な
夏でも足袋をはきをるは

九

平安の都は古い歴史をへて
傳説と不思議とに織り込まれ

様様の人の心の棲むところ
あやしの婆が怖ろしい
そのくせ好きなお伽噺めくほんとの話を聞かされました
それは斯うでありました

一〇

若い女孀や雑仕の人人
おとう（かわや）に行つて出てくると
ふつつり髪が切れてゐる
え體のしれぬ髪切ばば
狐や狸とは大の仲よし長い／＼お馬道（めんどろ廊下）のむかうに

大きな／＼火の玉をふらりと下げてとぼしてる

一一

わたしはおまへ様が見た様な
あやしい傳説と幻影の中に育てられ
いつ迄も／＼几帳の外に出なんだらどんなに幸でしたらう
現存を夢に過去にのみ生きるおまへさま
昔を夢に現在と未來に生きようとする私
お月様はおんなじでも流れの私は止まりませぬ

一二

生涯を蔽ふほどの私の悲しみも御存じなかつたおまへさま

それもいつかはと思つたことも
今その未来は早や永劫の中に消えてしまひました
心ばかり捧げたお燈明のかげに
一夜泣き明かした反逆の女の涙
今頃はその戀しなつかし上の御まへに
青海波でも舞つて在はさう
來るものは日々にあり
別るものは常になく
虚りの中の眞實も
まことの中の偽りも

みんな斯うして私の周圍をめぐるつて逝つてしまふ
夜の空虚の世界は魔のやうに
白い床の上に身を横へた私を死に一步近い眠りの國に誘はうとし
てゐる

兵營の子

霜は冷く蔓の上に銀色の光をなげて青い青い日の光りがガラス窓に冷たく凍るこの寒い夜を お前は今どんな夢を見てゐるやら家を出てからもう幾日 毎日毎日噂の出ぬ日はない 鳥の鳴かぬ日はあつても まだこの淋しさに馴れぬ心のおきどころ お前が祝人營の旗に送られて停車場を出た日くらゐお父様の機嫌

のいいのを見た事はない 息子のおかげで威張るのは今日が初めてと云はぬばかり 妹があした自動車を貸して下さいと云ふた時も「何卒お使ひ下さい」と頭を一つ下げた 妹はびつくりして笑ひこけました それから妹はむやみと甘え出した 娘を甘やかす術も知らなかつたお父さんはいつかつられてそれも癖になつてしまつた 五つの椅子は四つになつた 晚餐が始まると

皆黙つて見えぬお前の傍にきつとその空席に移す八つの目
 小さい弟は又も云ひ出す
 兄さんは今頃何を食べてゐるだらう
 服も四通りあつたげな
 靴も二つ外套もカーキ色やら黒のやらお正月着の大禮服も
 この子はまあいつの間に見て來たやうな手柄話
 お前の留守をみんなして
 楽しくおまへの噂する
 親子姉弟四人の上に
 もしかき亂す嵐があつたら

何とあんまり罪深い仕業であらう
 富貴にまさるこの喜び
 神様は私等の上を護つて下さるであらう
 寒さ暑さをいとふお身ではないが
 さうさう今は私等の子ではない
 陛下の大事な兵士の一人
 それに私が何を強ひよう
 どんなに淋しい時でも
 どんなに忙がしい日でも
 おまへの事など思ひ出しもしはしない



誠の戀は

もしもあなたが世の常の戀と申うてよりそへば

私は拒みます

もしもあなたが 偽善者のなす如く

その戒律を守るのなら

私は あなたに迫ります 悪魔の 悪鬼の 羅刹の 毒毒しい戀

をもつて

自畫像

人の畫いた繪姿にすら

人の作つた彫刻にすら

尊き聖でさへも禮拜するものを

神の御手に造られた御前さま

神の姿に似せて造られたる御前様

歸依する私が無理か

禮拜すが罪か

雪の日

火桶の中に呼吸つく紅き櫻炭のほのほ
靜かに音もなく降りしきる雪
君の言葉はことごとく詩にして
花瓣の降る如く我胸につむ
折々シネリヤの呼吸することくふるへて
我思ひ靜かに音もなく君の心の上に

山も谷もなくただ清く深く深くましろに覆ひ
外面はなほもしきりに雪ふり
かへりの道を忘れしむ

劇詩
阿難尊者と摩登伽女

- 一 水のほとり
- 二 煩悩
- 三 蠱道の法
- 四 婆毘多羅神呪
- 五 大幻術
- 六 祇園精舍

水のほとり

空も碧に吹く風も

樹木は眼醒むる様な青葉をつけ

道に馥郁たる花をもつて彩られ

小鳥は涼しく歌ひ

孔雀は王者の様な尾を擴げる

井の清水は混々として流れつぎす

摩登伽女

ホ……………何といふ可笑しさ

なぜか今日此頃の私は見る物聞くもの唯可笑しうてならぬ

花も微笑してゐる

水は聲立てて笑つてゐる

緑りの濃い若葉も風に觸れ合ふ度に笑つてゐるではないか

ホ……………何といふ美しい天地の中に生れた私であらう

私の髪はいよいよ艶やかに伸びて來た

私の顔は 唇は 手は 足は

水を桶に汲んでしげしげと見入る

云ふに云はれぬ満足さに心もをどる

お！ 身も軽々と飛んでゆくやうな
居ても立つてもゐられないこの歡樂を
わたしは踊らずには居られない
水の流れも 木の葉も 私の爲めに 踊りに合せて唄つてくれ
る

天地は限りなき愛の中から生れて
今や私の世界は新に生れた

ホ………何と可笑しいではないか

鳥も胡蝶も さあ一所に舞ひ遊ばうよ

花は花でも苔みのうちよ

(何とそんなもんぢやないかえ)

咲けば散る／＼實れば苦勞の種がなる

(何とそんなもんぢやないかえ)

娘十六苔みの花よ

(何とそんなもんぢやないかえ)

戀も情けもしらぬうち

(何とそんなもんぢやないかえ)

おや！ 誰かが来た様だ

(踊りを止めてイサむ)

近づいて来た

阿難尊者

そこにイすむ妹よ 一杯の水が所望ぢや わしに供養して下さい
れ

摩登伽女

尊者よ 水は惜しみませねど 私は賤しい旃陀羅の娘ですから

阿難尊者

妹よ わしは沙門の身なる故 眼に貴賤上下諸々の差別を見な
い

摩登伽女

賤しい私を手づから汲むだ水を お受け下さいますか
尊者よ あなたのお名は？

阿難尊者

わしはこの先の祇園精舎にまします佛の弟子 阿難といふ者ぢ
や 曉かけて托鉢に出で 舍衛の巷に行乞して今が戻りぢや
ああきつう咽喉が渴いた
有難う 妹よ さやうなら

摩登伽女

さやうなら尊者よ もうお歸りになりますの
さやうなら 阿難様

さやうなら 阿難様 さやうなら 阿難様

(阿難はふり向きもしないでいつてしまふ)

さやうなら さやうなら 阿難様 さやうなら

ああ 何だか急に邊りが暗くなつて來た様だ

花も色もなく 鳥も聲なく

何うしたのだらう 何だか不思議な寂しさが

ああ ああ

(考へながら口の内にくりかへす)

「妹よ私は沙門の身なる故」

おお あのお聲は

「身に貴賤上下の」

おお

「諸々の差別を見ない」

おお あのお聲は

お姿が見えない お聲はたつた今も聞えたのに

お姿が見えない

ああ もう行つておしまひなされたのだ

もう ここには ここには ない………

(泣き伏す)

煩悩

月は銀のやうに照り輝いてゐる

摩登伽女

ああ 見るもの聞くもの 今宵はなせ斯んなに寂しいのであら
う

木々の葉擦れの響につけ

静かな虫の音にも

戀しさ やる瀬なさ

一人はいらいらとして

一人は何の心もなく 月を眺めてゐる

二人の間に沈黙が続く

月は二人が別々の思ひに

答へつつ 囁きつつ

旃陀羅母

女よ ほんによい月ではないか

摩登伽女

もうもう私は月の事など何うでもよい

旃陀羅母

昨日迄も今朝までも春の小鳥の様にお喋り
で 飛蝗バツタのやうにお跳ねであつたお前は？

気分でも悪いのか

昨日の月も美しかつたが今宵は又ゆふべよりも圓かに 丁度お

前の齡の程とはなつた

さあ昨日の様に踊つてお見せ

摩登伽女

私はもう昨日のわたしではありませぬ

今日不可思議な思ひを得て歸りましてから

花も鳥も昨日の色音ではありませぬ

好きな月も今はしみじみ憎くなりました

おもへば腹も立つ

瞋恚の焰にもへてゐる

ええ もうもう私はこのよさり

月のよい程心は暗ぢや

輝く程に隈ない程に

體中の赤い血は悉く

眞黒になる程妬ましい お月様

旃陀羅母

これは又仰山な 三千世界に どの女がお月様を妬まうぞ

扱ては そなたは戀を知つたのか

喜びの花は凋み 涙の泉の湧くも戀ゆへ

お前の魂を盗むだ男は誰か

わしの術を以て 法を以つて きつとその男の

魂をとりかへしてやる

夫れは誰か

長者の子か 但しは旃陀羅の族の子か

摩登伽女

いいえ わたしの思ふ殿御はそんな類の人ではない

夢にも幻にも女の姿を想うてはならぬお人

その嚴めしい戒律の夜の床にも

大かた このお月様と一緒に寝てムろと思ふにつけて

旃陀羅母

さういふ男は

摩登伽女

尊者阿難といふ人 今日私が水を供養して上げました

母上の日頃の術を以つてここに呼びよせて下され

旃陀羅母

そんなら お前は阿難尊者を眞實思うてか

佛弟子の中にも多聞第一と呼ばれたお人

なんぼ お前が戀ひ焦れても

嚴しい戒律を破りはしまい

お前の様な若い女に 衣の裾の片端でもさはらせはしまい
それは木像や繪姿に思ひをかけたも同然ぢや
あれはお香を燻いて手を合せて拜む姿ぢや 女の思ひをかくべ
き人ではない

あの人許りはわしの術も叶はぬと諦めたがよい

摩登伽女

なせ 何故に

日頃は人の爲め施す術も わたしの爲には叶はぬとは

阿難様の心象こころを胸むねに寫して死ぬより外ほかに救すくひの道はないでせうか

旃陀羅母

わしの術のきかぬものが二つある

一つは死人と

二つには離慾の人と

摩登伽女

え そんな筈はない

如何に三界の慾を離れた人であらうとも 花には蜜がある 人
には情がある

ましてあの優しい阿難様が 私の命を捨てて願みぬ筈はない

佛の道が情けの道なら きつと私を

いいや 五慾の樂を斷つたあの人は佛の弟子ではない

悪魔の弟子ぢや 鬼ぢや 私の心を奪ふ盗人ぢや 命をとる殺
人ぢや

いとしさ餘れば憎くもなる

優しい少女心も戀なれば鬼になる蛇にもなる

母上の術の叶はずば 私が蠱道の法を行じてもきつと きつと

おおさうちや

必らず思ひを遂げて見せる

蠱道の法

摩登伽女

この森の中の静けさ

人の住むべき世界とも思はれぬ

くさむらになく蟲の音は

あれも戀ぢやと聞いた

今わたしの歌ふ歌に

百蟲よ 聲を慕うて集れ

我足許によりて來よ

様を始めて見てしより

今の思ひにくらぶれば

きのふの春は 春ならず

春のなかばに 秋が來て

生けるこの身が死の床に

様の口ぢやとなぞらへて

口つけしたる花びらの

落ちてこぼれてはらはらと

流れて浮ぶ 芬陀利華

様のゆくへは知らねども

残る泪の わがおもひ

寢て夢見るは常ながら

醒めてうつつの夢を見る

この妄執が憎まりよか

生れて初めて願うたのぞみ

かけて思つたその人は

思つてならぬ 人ぢやとは

とても叶はぬ戀ならば

死よ すみやかに来てたもれ

いやいや死ぬのはいやなこと

同じ死ぬならもろともに

地獄の底もなに怖からう

餓鬼道の迫苦が何であらう

どうせ蛇の様な 私に思はれたが あの人の因果ぢや

きつと私のものにして見せる

佛の御手から離して見せる

所詮地獄に墮ちるが定なりや

阿難様ももろともに

さすれば 地獄もいつそ私には極樂ぢや

わたしの思ひの強よさ

生命のうた 血のうた 焰のうた 泪の歌

心ない蟲までも誘惑されるのだ

阿難様が何だ

離愁の人ぢやと

ホ……………

一匹 二匹 十 四十 七十 八十 九十三 五六七

八 九十九 百匹

數へて手づから陶物の壺に納れた

上から薄絹を張つて中を覗く

おう戦ふは戦ふは

弱きものは 強きものに

強きものはより上の強者の爲めに

強者よ 強者よ 最後の勝利者よ

九十九匹の敵を斃した百蟲の王よ

そなたは何だ？

おお 長蟲！

くるくると蝮局を巻いて

赤い血の様な舌を出して

九十九匹の敵に勝ち誇りたるその姿

私は咒の神と崇めるであらう

私にその生命を與へよ

長蟲は二つに断つ

半分の尾の方は摩登伽女の腕に

捲けば 猶生命あるや

靈あるや 執念はくるくると巻きついて堅く

堅く ふくよかな白き腕に喰ひ入る

右の手には首の半身を握つてゐる

なほ鎌首をもたげて赤い舌を出して

摩登伽の満足さうな笑

婆毘多羅神咒

旃陀羅母は娘の爲めに咒ひの祭壇を設く

牛糞を地に塗り

白茅を積んで火を點し

燃え盛る火の手へ

百八枚の妙過迦の花弁を投げ入れ 投げ入れ

一枚毎に婆毘多羅神咒を誦す

旃陀羅母

母の祭壇へと急ぐ

阿磨利 毘摩利 鳩々彌 三磨彌 移邦婆頭賜
頻頭彌東養 提菩跋利沙提 毘地踰多提揭闍提
毗三磨耶 磨羅闍三磨提 跋阿夷闍

火焰の周圍を繞りつつ呪文を念す その毒火は怪しく煽られて地獄の硫黄で焚き
つけられたやうに青い焰 赤い焰 白熱の光り

摩登伽女の持ちたる蛇の首の半身は焰の中に投げられた

大地は指さば はづるる共 虚空を繋ぐ物はありとも 日は西よ
り出づるとも

潮の満干ぬ事はありとも 我婆毘多羅神咒の祈りの叶はぬ事は有
るべからず

ここにすみやかに阿難尊者をして來らしめよ

天よ 魔よ 乾達婆よ 火の神よ 地神よ 暗きにある諸々の邪

悪の神よ

悪靈の群れよ 法の理を越えて ここに我婆毘多羅神咒の大自在

力を示せよ

邪悪 もろもろの利欲

もろもろの情慾

電光 地震 暴風雨を司どる

天魔 鬼神も來れ

靈と肉とを結び付くる所の

不可思議なる その刹那 瞬間を
司さどる 魔神よ來れ

火より 水を

水より 火を

虚 實にあらしめ

實 虚にあらしめ

無慾の人をして

大慾となさしめよ

この時 將にこの時

よろよると よろめきつつ

魂わけし 影の如き人

現れ來る 阿難の姿

摩登伽女は忽ち 阿難の側へ

阿難は摩登伽女の手

大幻術

摩登伽女は 来るべき人の爲めに姪席を拂うて美はしい床を敷き
名香をくゆらして

蛇の半身黒焦となりたる媚薬の壺を置く

摩登伽女

来た 来た 阿難様は来た
わたしの思ひが通つたか

蠱道の術が

婆毘羅神咒の法が

祈りは遂にきかれた

阿難様はもう疑ひもなくわたしのものだ

阿難

哀れむべき者よ 外道の女よ

煩惱の炎に やきつくされ

滅びを待つ女のあはれさ

わしに依つて燃えたる火ならば

その瞋恚の炎は自らが消してやりませう

摩登伽女

いいえ 瞋恚の炎は消してはなりません
 焰の中に目さめたわたしは
 私の身の廻り總てのものを火の海とせねば置きませぬ
 薪つき 油つき 灰となるまで私は炎でありたい
 あなたはまだ見もせぬ未來をたのみ
 戒律護る僧房の中には
 女の思ひよりも優しく
 女の黒髪よりも強よく
 引かるるものがありますか

阿難

さては煩惱の瞋恚に狂うたか哀れなるものよ
 斯く教ふる自分は何物である
 釋迦牟尼の一族として王家に生れた身が佛弟子となつてこの方
 舍利弗 目蓮の願ひさへ拒み給うて
 わしを常侍の比丘となさしめ給うた
 天地のあらゆるもの
 哲學 眞理
 四諦を覺つて禪定に息ひ
 邪を廻りて正に歸せしむ

慧眼限りなき甘露の稱名はあまねくたたへられ
 如來は人天の至尊にして
 能はざるなき救世主の
 その側らに常住仕へ奉る身が
 とすればその祇園精舎にゐる時でさへ空虚な胸にひしひしと
 喰ひ入る物淋しさは何であらう
 あれ程冷やかな 智慧と烈しい意力で
 鍛へ上げられた教團の中にも
 愚なわしは 止むに止まれぬこの胸の高鳴りを何うする事も出
 來ない

摩登伽女

ああ 哀れむべきものは この女のみでない
 お師匠様のお側にゐて何年かの難行苦行覺えたものは何で御座
 んす
 あなたが その教へから受けた官能のよろこび
 それよりも もつともつと尊い強い眞實の喜びを
 この一よさにたつぷりと思はせて上げませう
 目には美しい色がある
 鼻にはこころよい香りがする
 舌には甘い味がある

魂がこの世の凡べてを忘れさせる歡樂と身を蓋ふ程の性の悦び
に

目醒めさせなければ おきませぬ

さあ 阿難様 わたしの目を見て下され

わたしの目を

わたしの目を……

短かくなつた蠟燭の灯が

風もないのに よろよるとよるめいた

祇園精舎

佛の言く 鬚髮を剃除して

沙門となり 道法を受くる者は

世の資財を去つて

乞ひ求めて足る事を知り

日中一食し

樹下に一宿し

愼んで再びする勿れと

阿難

自分の惱ましい頭は數しれぬ不審に又しても閉される

思へば危ふかりし昨日哉

賢い思慮がやうやく自分を引離しはしたものの

おお 誰やら人のけはひ

花臺をつけ 新衣を着

美しい瓔珞を纏うた

おう昨日の女

阿難の後を慕ふ

阿難止れば 止まり

阿難歩めば 即ち歩む

巷より城外に 城外より遂に祇園に

歸る迄も阿難の後を追ふもの

浮世を捨てた自分が 今更

戀も女も自分自らの縁をさへ斷つた身が

この有様 愧かしさ 淺ましさ

慚ぢて避けてもまた執念くつけまどふ

美しき女の影

世尊よ 我を慙れみ給へ

さめさめと泣く

世尊

阿難よ 鬼神は邪に 毒害すれども 戒ある人を
犯す事は出来ない

お前は今日何に悩まれたのだ

阿難よ 鏡に寫る俤は虚であらうか 實であらうか

女心は移り安い

そして常に毒を含んでゐる事は

蛇蛇にも勝つてゐる

女は金剛のやうに 人の身を破り

火焰の様に 人を焦す

その聲は死の響を傳へ

その手は牢獄のやうに人を囚へる
行きて静かに思ひを廻らし

樹下に結跏趺座せよ

精舎の門に来て さめざめと泣く女の聲

戀に身も心も狂うた摩登伽女は

世尊の御前に呼び入れられた

世尊

女よ お前は阿難のどこが好ましいのか

摩登伽女

斯うやつて其の人を前に置かぬ時

想像は 太陽のやうに 餘りの光輝にうたれていふべき言葉も

しりませねど

私はただ 阿難尊者の目を愛し 口を愛し 鼻を愛し その聲
を愛し その歩行あゆみを愛します

世尊

美しきその阿難の目も鼻も口も阿難の五體は尿尿を盛る器にす
ぎない 垢穢の身とは知らざるか

娘よ 色慾は火の様に自らを焼き人をやく

愚痴の凡夫は燈火による蛾の如く災の中に身を投げんとする

智者はこれと異り 常に色慾を遠ざけて靜かな樂を味ふ お前
も今から道に入るがよい

沙門の妻となるべきを願ふお前は阿難と同じくその髪を斷つに
母の許を得て來よ

摩登伽女

千筋と撫でし黒髪を斷つに母は惜みて泣いたれど髪も珠も 瓔

珞も 思ふ思ひの叶はぬに何の要がありません この身さへ

この心さへ

唯この浮世の最後の願ひ 煩惱の終り 愚痴の末には どうぞ

唯一言

阿難は眞實 今も私を思うて居りませうか但しは思はいでか

唯これだけが知り度い

阿難は遂に 思つてゐるとも ぬないとも 思つてゐたと ぬなかつたと

すでに過去の事すらも その瞬間の心のきらめきも

遂に 摩登伽女には答へてはくれなかつた

私は思うてならぬ事を思うたのではあるけれど

せめて世の名残りに聞いておきたかつたのに

佛はいふも思ふも思はれるもつひに五百世の過去の縁であつた

と

せめては忘れた昔の縁と思つて慰めよう

佛は弟子を教ふるには女を悪魔の様に

けれども 女の戀の的となつた男は

女の爲めにはいとしい悪魔ではあるまいか

女は髪を捨て 世を捨て 戀を捨て

阿難は絶ちても 絶ちても 絶ちきれない温情を世尊に移して

月を経 年を経て 遂に戀も 人も

唯聖らかに入寂した

几帳のかけ 終

幻
の
華

摩訶不思議

○わたつ海の沖に火もゆる火の國に我あり誰そ
や思はれ人は

親の名をせめていふなと願へども世人の口に
關はあらず

わひぬれば浮世の人の口の端にかかるなげき
も世にあるがため

大空に夜も日もあらず自らの心を閉ぢて守る
淋しさ

幾人の口より口に傳はりて我目にも入るあや
しき我名

我名をば誰か名ぞともいふかしむ刹那の後の
寂しきおもひ

摩訶不思議噂の生みし我といふ魔性の女いく
たりか棲む

何ならぬ人のまなさし悲しくて世を狭うしぬ
ある日ある時

嘲りも痛罵も今はよろこびの聲ときくまで世
なれ人なれ

数多き愚人のそしり徒らに我身ふるまで世に
怖ぢむとす

いとまあれやさかしら人は木の葉吹く風のま
にまに我門叩く

罪のまほろし

同じ世に生れあひしもかりそめの契りならし
と思ふ愚かさ

ふともものつまはつれなる出来心それと聞き
ても悔やまぬものか

末遂に思ふとだにもいひ合はぬ宿世なれども
忘れがたかり

遠くなりいよよ戀しくなつかしし憎しと見れ
ばいよよ忘れぬ

死にまさると言ふより外の言葉さへ知らぬも
のとは誰か爲めなりし

年月はかかはりもなきよそ人となしぬ昔の我
思ひ人

ふと今宵まことに人を戀ひぬべき純の心を尋
ねていでぬ

理の外のことわりぞとも許さまし道をうらぎ
るこの心をも

現世にありやあらずや逢ふといふちきりはす
でに死よりはかなし

同じ世の月日の下に生れつと知れるばかりに
何の咎めぞ

この世にてあり得ざる事願ふ身のまた後の世
に何をか求めむ

一度もあやまたざりし身の悔よそれさへ人の
科と恨みき

かへり來ぬ昔に又もかへり來て今更泣きぬ君
を思出で

かかはりの無きよそ事もしみじみと身につま
されて泣くも戀故

自らが唯一人のものといふ衿も持たずあはれ
 年へぬ
 観世音の御像抱きて寐ねはやの春の夜心我戀
 ごころ
 何となく涙くましき淋しさの静かに迫る夕月
 のかげ

見し人は月日の積りへだつれど思ふかげには
 年もへなくに
 十五過ぎ泪の色も紅うなりて我たらちねを恨
 みまつりし
 ふれ難き心としらで近よりし身より我世のた
 そがれは來ぬ

この泪今の思ひにあらねども其日の如くしみ
じみ泣かる

あらざりし物語かとおもふほと薄れてゆきぬ
初戀人は

君在りと思ふばかりは知れれともその心はた
いつくにかある

けふ幾日夢に續きて泣く事もありし運命か得
しわざはひか

ひとり居れば逢うて別れて忘れつるあまたの
人の浮かふ寂しさ

呪ふべき女なる哉男をば見たる恨と知りにし
悔と

年も日も思ひも今はこし方の昔の夢の見たき
宵かな

人形に戀を許しぬたらちねは幼なき日のちさ
さかひなに

得ざるうちはや捨て去りぬ少女子のへりくだ
りたる心悲しく

諦らめてわが思ひごとかなひなば忽ち死ぬと
自らいひぬ

われはもと花の床なる土くれのあらざりし日
を思へとてこそ

身にそへる影は一つに足るものを二つ並ぶる
罪のまぼろし

我魂は幾とせ昔さすらひの旅路に出でて今日
もかへらぬ

思はぬにありて悲しくおもふにはなくてぞ辛
らし人のえにし

讀みふけり終には世をもはかなみしかの玉章
に得たる運命か

御大典の日に

千早振る神の掟の高御位けふ昇りますみ
のりかしこし

十六日京の二條の舞殿のうたげの聲は萬世ま
でに

横雲をかすめて渡る飛行機のなへて勇ましつ
 はものたちは
 御幸仰ぐこの福岡の野も山も櫛の紅葉に照り
 かがやきぬ

御幸

ほとしほしここを都の筑紫路に御幸の御旗野
 にもかがやく
 なにがしの中尉か飛ふよ青空のけふもめてた
 くあやまちあらすな

不知火

櫻ちる浪の上越え山こえて師の君來ます筑紫の國へ

師の君の來ますむかふと八木山の峠の若葉さみどりのして

ここも亦都戀しのおもひ川泪の跡を尋ねてぞ來し(太宰府にて)

ありし世の七堂伽藍かげもあらずここにもめくる輪廻の掟

あなかしこ王も聖もぬかつきし御佛なればみ名はしらねど

観世音寺ゆふべの鐘に花散れば身も世もあらず泣かまほしけれ

黄金なす大海の上菜の花のかをれる中を我車ゆく

遠賀川とんががわ小暗らき中に銀色の光りは長く夜は明けそめぬ

ぬかつきて何を祈りしいにしへの大貳の姫がかけたる願ひ

なにがしの帝が歸依の盧遮那佛今も昔の笑まひしませり

古の神代のこと語り出づ阿蘇の山より流れる水

磯馴木のなれてはここに幾とせをわが身に添
ひてけふも送りぬ

その昔筑紫の山に照る月を同じ姿と誰かはな
げく

山のあひ今も平家の落人が世にかくれたる川
上の里

周囲の人々

今日のひも我ある世なり天地にこのあるわれ
が何を教ふる

徒らに越え得ざる子を筑紫路の山のあなたに
いつまで待たむ

やことなき裔ぞと思ひ吾子にもぬかつくはこ
れ神に等しく

入營の旗の印に送らるる吾子の面わに時雨降
るなり

都にてまつとの便りくりかへし戀人のごとな
つかしみけり

春の宵君にはしめて知られける唄女のため衣
選みする

今宵君が唄女の髪長長と誰かぬば玉の床にな
びくや

一日を十年のごとくいつくしみめでにしこと
も淋しきよろこび

待つ人よ人にかくれてあふとだに淋しきものを
幾時かへし

君いまだあらざりし日のうらみごとかひなき
泪またせまりくる

きみ思へば戀のめでたきそれよりも猶美しき
情をぞ思ふ

よき稚子は鐵の如くに鍛はしめ花の如くに女
を培へと

母とのみただかりそめの親の名も喪に籠る日
の重く暗けれ

喪をしらす如月の夜のうら淋し静かに更くる
御法の聲も

夕日見て夜明けをたのみ出づる日に暮ると
なげく女の心

終焉は誰にも來る門邊かと今更なげく御柩の
前

みとりすれば我身ひとりが惜しむぞと命のま
へにひれ伏す思ひ

生れ出しこの一人故天地のよろこびあれや人
の世のため

育ひきみ

その人の亡せにきといふことすらも風の便りに
きく身となりぬ

一人して君思ふへくたそかれは園の茂みにか
くれて泣きぬ

ゆき別れやがては今の死別れこの泪をもはぐ
くみし人

そなたほど似合ふはあらし口紅の美しさよと
言ひし君はも

この泪亡き人なれば知りもせめなき人なれば
心も知らぬ

はらから

はらからを親なき後の親ぞとも思ふにつけて
泪こほるる

いつになく優しき事を言ひやりしそのかへり
言に今更泣かる

我爲めに悲しき日とも知らざりし知らざりし
日の思ひに泣かる

我顔に似るといふにもいとほしさ笑ましきほ
どの人真似もする

おとなびし歌など書きて送りこし小さき姪を
いとしみにけり

いとしき姪

たらちねの忘れがたみと姉妹がかたみに偲ぶ
親の面さし

おもへらく情の袖に包まるる姉一人ゐて我世
のひろき

筑紫瀉我窓を打つ若葉風君がかさしの前髪を
ふけ

袖の港浪の遠音も聞こゆるや静かなる夜の東
路の夢

五位様と呼び馴れませと教へやる紫に似しい
としき姪よ

十八の少女可愛や故もなく唯人真似に哀歌を
つくる

わがへたる涙の味はこの人らゆめ知らゆなと
かけてぞ祈る

宵毎に月見ること君を思ひ祈する身となり
ぬ此頃

知りそめて十年ばかりははや過ぎぬ時計の針
 の一時がほど
 いつの日も旅路のはての今日とおもふねぐら
 に歸る鳥かげ見れば

まらうど

ゆうべゆうべまろくなりゆく月のかげ今宵か
 君が齡を數へる

おもはねどもしやと思ふ喜びの光りにあはむ
日のありぬやと

ああまたも我を離れて故しらす沈む心よ夕と
なれば

美しく花野をめくる泉とも聖者に似たる君を
描きぬ

我を忘れ世を忘れよといふ人の禪定になど思
ひはめぐる

あらぬことわれは思へどよき事を君は思へり
相向ひゐて

きき残しいひ残したる一言の思ひ抱きてかへ
る客人

現世か後の世かともためらはる二人歩めば我
か人かと

少しまた足の冷く心地あし思出つらきこの病
かな



唯一歩このあやまちとへだつべくいつの日ま
でも會ふまじところ

知らぬ人といにしへにして會ひにきと物語め
く先の世のこと

あはれこの病に寐ても物問はぬさかしら人を
憎しと思へど

或時の少女の心母ごころ親しみ初めし女のな
さけ

今しがたありへし部屋にまらうどと我聲とな
ほうつつなる灯と

けふの風は今日ぞ吹くなるいささかの事にい
らたつ君がみ胸も

何ならぬ遊びのまさへ折にふれ人とあらがひ
足らへる心

思ひしに似ぬかよわさと罵られ見しらぬ人の
文ぞあやなき

明けぬればくるるを思ひ日くれてはあすを頼
みぬ何とはなしに

面白うあそべる人を見れば來ぬ輕き妬みとか
ろき淋しさ

殺されて少しうごめく蛇一つ心にかけて忘れ
ぬもうし

人と居て何とはなしに怖れけり我さへわかぬ
心のくらさ

昨日おもひ今日は忘れてあすの日はあすの心
とかしこき教

死の罪も因果の罰もものかはと我願事と重さ
くらふる

思ひ切り憎きことなどいひて見る何とはなし
にいらだつ故に

いつ如何にくつかへされむ身の不安積りつも
りて幾年かへし

昔より持てる衿りを今更に捨てむすてじとた
めらふ我は

あやまちといふ程ならぬあやまちもいたく悔
ゆるや物言はぬ人

こここそは破滅の門と思ひつつそとのぞき見
て吾とたちろぐ

惜しからぬ命の中も病む時は生のいとしさ身
に迫りくる

はるかなる國の言葉の戀の歌君に習へば哀し
きものか

六條の姫君尼になりまして筑紫に我を訪ひ來
ますてふ

年わかき白装束の尼ふたり髪長き身の面恥か
しき

やうやうに庵主の尼はおよすけぬ紫衣の袂の
撫子の花

この秋に剃髪の尼一人あり庵主の君の寂しき
音づれ

髪長く恨みも深き罪の身の何を彩とるこの裳
裾かも

春より秋へ

やはやはと春艸萌ゆる野の末にたれか我ため
泣く日とおもへる

花と花うす紫と紅とうなつきあふは何のここ
ろぞ

この春も花は咲きけりあはれさは此身一人の
いのち護りて

しみじみと春の光にふるるとき何か悲しき囁
ききこゆ

いつしかも小町櫻の咲きかへる春としなれば
思ひ出づるもの

白桃は散れどもちれどちり止まず我愁ひにも
泪にも似て

誰が爲めの命ともなき年をへて春のいく度別
れては來し

露の臺にがきを噛めばいづくとも春のかほり
のただよひてくる

黒すみれ喪の色なして咲き出でぬ彩ある花の
中のすねもの

梨の花白きばかりが夕くれの庭面にうきて見
ゆるも淋し

極熱の風吹くといふ八月のまひる半のひまは
りの花

ゆあみして白き袂に風吹けばかひなき人もま
たれぬるかな

山清水流れて寒き八木山の峠を越えて福岡に
ゆく

青空に夕立雲のただよへば莊園の子は手をう
ちて呼ぶ

屋根の上に石ころ多き信州の山の家戀し眞夏
のあつさ

虹の橋東の山にかけてける思出もなき夕空な
るに

初夏や白百合の香に抱かれてぬると思ひき若
草の床

夏の花五月雨頃のけうとさも今年初めてしり
しならねど

風吹けば母が軒端のつりしのお風鈴の音など
思ふ夕ぐれ

思ふ子のなつかしさをも薄らぎぬ甘き葡萄の
熟したる頃

我心合ふ日もあらずいつしかに花畑にも百合
の花さく

夏の日には身に重すぎし黒髪の長きをかこつけ
だるさあつさ

蝶の舞花のことばも天地のよろこびうたふ六
月半

揺れば亂れみだるればちる露草のまたなく悲
し筑紫野の路

月に光る露の白玉おびやかし踏む足下の撫子
の花

青磁色の空のあなたに歩みよる雲あわただし
夕立の雨

つばくらめ筑紫の空のあて人とけさむかへた
りかきつばた咲く

これやさき彼やあとなる秋ならで嵐の前に散
る落葉かな

久々に雨は降り來ぬ木も草も喜びの色に息づ
くが見ゆ

我眠る紋紗の蚊帳を覗き見る月の光りにしづ
心なき

天の川五色たにざく笹につけて何の願ぎごと
十五なりしか

天の川昔の人のおもひをもこめて今宵の星祭
りする

忘れては夢よりも猶おぼろなる思出もあり星
合のそら

ありし日は今宵なりしか幼く戀の初めの歌習
ひてし

一度は神も許せと祈るなる七夕に似し星合の
夜を

魂祭かへるみたまに二人ほどかほ見しれるも
わびしかりける

絹燈籠灯ともすかげにしよんぼりと佇みぬれ
ば寂しさの湧く

長廊下けふの取り沙汰誰やらの紺のゆかたの
なまめく噂

三つ並ぶ中の人形が何となく面やつれ見ゆわ
びしき日かな

人形の夏の衣を縫ひあげて似合ふと見たる小
さきよろこび

七つ星北の空なる雁がねの鳴く日となればま
たなげかるる

あれどなきこの人の爲め喪に籠るけふにふさ
へる長月の雨

蟲の音ようき身の數は十六夜のあまり戀しき
ゆふくれのそら

吹く風は枝に梢にこだましていかづちのごと
雨ふりしきる

高臺院の萩ちる頃もありしもの月まどかなる
夜もありしもの

ものすごく月は暈きてはらはらと俄に起る山
おろしの風

やがて散る木の葉むせびて泣き止まず妻戸の
外も内も夜更けぬ

わがための戀もうらみもかたきをも忘れねば
こそ秋はかなしき

秋の宵一つとまりし蚊の命奪ひしことも淋し
さのわく

天地は木も大空もゆく雲も我ひとりゐて秋は
來にけり

秋くればわりなく人の憎まるるこのいくとせ
のなれし悲しみ

我爲めに今宵の月はおぼろよに似ると泪す人
は誰が子ぞ

ただ一つあらはれ出でし宵の星小暗くなりし
心の上に

秋の風君がのきは吹かぬやと氣強き人にい
ひもこそやれ

紅き楓思はぬ方に唯一つ落ちたるを見て思ひ
出でしこと

灯の色はとほく亂れて秋雨の降るや涙に見た
る乳母か家

あけぼののさ霧の中に溶けあひし我心より白
露ぞ置く

伏して思ふ柳の葉末露毎におく月かげも神の
御業と

いかにせば心のどかに住みぬべき木々の葉ご
しの夕月のかげ

父母が神にも似たる美しき語らひの日より我
 すみにきと
 青色の翡翠の珠を百八つ聯ねて見むと奢りて
 いひぬ
 美しう生れしといふ身の幸は人にしられて其
 後のこと

几帳のかけ
 斯る日は几帳のかけにかくれたる百年前の我
 をし偲ぶ
 わびぬれば庶人の中に雜らひておどけたる眼
 に観物となるよ

來ぬ人は遭ふをほりせぬ情しらす情しらすを
ば待ちし一時

おもはれて思はぬ方に身をよする今宵と思ひ
いとほしかりぬ

何ものかいとしかはゆししみじみと人形抱き
ぬ息あるやうに

おそろしき人の中傷は廣ごりぬつぶてをうち
し水面のごとく

幸多くいねたる妻がかたはらに一人目さめて
泣くはたが子ぞ

たらちねの乳房の外にふれしことなしと言ひ
にきまことしやかに

寝にゆきてとり残されしその後の戀のやうな
るうら寂しさよ

人の精神こころ長きいく年あれもせでみごもりしま
ま動くと思へり

今ははや流人となりて渡るべき悲しみもなく
よろこびもなし

長き長き鎖の中の一つらのけふなる日をもか
くて終りぬ

聖とも思ひし人のわれ戀ふと七年すぎてきき
しおどろき

思ひわびきのふの如くけふの日もすでに夜と
なりあかつきとなる

忘れては又おもひ出でよ玉勝間いつか會はむ
と言ひしならねど

幾度の心變りを許すほど廣きところは吾持た
なくに

一疊のおなじたたみに幽明の所を異に君とわ
れすむ

ふと忘れ秋のけしきにいつはられ春咲く花の
咲きしたぐひと

淋しさに馴れぬ心の置きどころやうやくくれ
し今日にもあるかな

女子が生ける限りのつとめなる髪結ふことも
ものうき日かな

七月に降る雪をもて火を焚かば我願ぎごとも
叶ふべしなど

へだつるは山か野もせか和田津海か否々人の
邪しき妬みか

あはれこの賣婦に似たる偽りを言ひうる程に
世なれ人なれ

夕暗や心に止めて聞かざりしその物の音の思
ひ出づるよ

或夜ふと思ひしばかり幾よさをその祕事みかこといよ
よ忘れぬ

くれのこる十日ばかりの冬の月風の音さへ何
か淋しき

降りつもる雪かと思れば悲しかり行軍の子の
肩に帽子に

元祿の古人形の肌ざはり誰が添ひふしの思ひ
なりけむ

歌に生き歌に死なむと思ふ身はそれにもまさ
る戀もあらく

吾心我身と共に地に埋れやがて花さくものに
しあれば

この歌の我いとしさはみそか子の悔と涙に生
みし心地す

色里のなりはひはよし面白とふと思ひたり我
を忘れて

いつの日か我名をよびしその聲の今も聞こゆる松風の音

我名しる幾多の人にまみゆべき緋文字の歌よとはに生きよと

絶對の死物はありや我心火にも水にも命はあるを

我方に星は流れぬ思はずも人にしられぬ喜びや得む

いつの日に誰かも見けむ不思議なる雲の形にしみじみ見入る

湖は暗く冷くなつかしし魔に親しめる心ならひに

我といふわれ亡^きはむ身の爲めのその勤行も習
ひはすれど

いや遠き空のはてより風吹けば我に聞かする
便りとおもひ

我を得しそのあやまらも戀しかり遠くゆかし
き代々の歴史も

我かくてひとり歌へばぶしつけに戀をしるや
と人の問ふなる

誰がために何のかかはり我魂のよみがへる日
のありもあらずも

月の光ひそやかに來て語らひぬ汝が思ふ人の
面影見よと

榮達の榮の冠地に落ちて咲きし花かとそと泪
しぬ

駒鳥は枝より枝に我心人より人をたづねてぞ
ゆく

如意寶珠君さながらに持たりとも我心はたよ
みがへるべき

知らずして植ゑしは世にも怖しき血ににじみ
たる紅の花

痛恨に堪へぬなげきを生涯の榮の時に持つが
あはれさ

かくあれと祈りしことは昨日にて諦めの後の
心易けさ

勇ましよう野に放てよといふ人の心の駒に誰か
鞭うつ

或時は連理の枝もいとわびし春の花咲き秋の
花さく

ゆくりなく地上の人と語らひぬ海に棲みたる
人魚ならねど

かくれなば几帳のかげとならひしに名もなき
人の影頼まるる

眼の前にある人も猶遠々しへだつと見れば三
百里ほど

物申す逃げし小鳥のいつくにか鳴く音聞こゆ
とひそやかに来る

旅路

船の旅あすは目さむる浪の上港の街のあかき
ともし灯

入船をしらする笛の音聞こゆ海さへ見えぬさ
霧の中に

ものおもふは祈るにもまし幼き頃よりつづく
この夕かな

海こえてしらぬ他國にしる人のありやと思ひ
佗しき船路

入船か出船か笛の音きこゆゆくもかへるも港
はかなし

紺青のみ空に船のかくれたる其日よりして海
のかなしき

赤々と燃ゆる夕空南洋の景色に似るときけば
なつかし

海と空一つになりて燃え出でぬ夕日かぎろふ
濱邊に立てば

高き山低きこなたの青色の山のあひより雨雲
ぞ湧く

船房に夜は更けゆきて瀬戸の海や我思ひ子の
戀語きく

船の旅うす明りせる窓の邊に周防長門の空見
え初めぬ

汽車の窓ゆそとあけたれば小鳥らは須磨か明
石の夜明をうたふ

夕ばえの空美しと泣く人の面影見ゆる西山の
さと

停車場の紅きさうびの眼に残る初夏にして旅
を思ひぬ

われいまだ世にあらずして見しこともありへ
し如きこの景色かな

寢臺車ゆうべ別れし窓に来てそと顔のぞく有
明の月

汽車の旅都の空と我家と近づくままに遠さか
りゆく

夕日あかく野もせはくろくたそかれて今日も
日くれぬ遠國の旅

末遠く君が邊りに續くかと見はてぬものを黒
きまがね路

我心やうやく遠く離れ來て淋しきことも思ひ
出だされ

浪華津や橋の袂にしよんぼりとイむ見れば小
春に似たり

昔人はかなき夢に袖ぬらしその雨ぞ降る浪華
の街に

油屋のお紺が宿をまたとひぬ四度目にして初
夏に入る

その昔かどはかされし我魂たまのかへり來るかも
遠方の船

手にむすぶ御手たらし洗川の水鏡わが十八の思出ぞ
すむ

新らしき年たつけふを神路山伊勢の宿りのあ
かつきに見る

ここに來て神代の事も忍ばるる御手洗川の朝
つく日かな

美しき月の光を見てしより伊勢の眞珠はみご
もりしとぞ

うつくしき大和の水は紫にゆるう流るる葛城
の里

血の跡よまのあたり来て金剛の楠氏は戀し見
し人のごと

停車場を出づれば續く京の町比叡の峰もたそ
かれにけり

三條の橋ゆく人と水の音と静かに更けぬ萬屋
のやど

人をまつしんきくささに出て見れば東寺の塔
はたそかれにけり

夕されば鞍馬おろしの窓うちてうら悲しもよ
人の子故に

相國寺の僧の群れとや寒行の御經の聲す門の
邊りに

鈴の音と御經の聲のいと寒くみぞれ降る朝京
の街ゆく

筋壁の尼御所見ればなつかしな我住むべきは
ここなりしかと

志ざす佛の爲めにいささかの布施參らせて名
を言はざりき

由緒ある京の御寺の美僧たち共に語れば紅葉
かつ散る

ついで消え消えてまたつく仁丹の廣告燈に春
の雨ふる

訪ねしは我が逢ひしは誰やらむ物語めく嵯峨
の夕ぐれ

歩みおそき三人の袖の萩の露嵯峨の山道鈴蟲
のなく

三會院の萩の上風身にしみて我世のほかの世
にもすみにき

僧房の中に見出でし淋しさに昔の人の涙をぞ
拭く

物語今し終りぬ見かへれば萩も庇も暗にかく
れて

思ふ子の來るかくるかと三條の橋の袂にたそ
がれはきぬ

雲水の笠かたぶけてゆきすぎしその横顔よ誰
にかも似し

あやまちて女犯の罪に墮ちにきといふ便りさ
へ旅はなつかし

離るればはなるほどの執着を都に残しこの
春も逝く

端居する若き二人を見てしよりふと妬みしも
旅心かな

われは今よみの國へか來しごとも名のみに聞
きしほととぎすきく

湯の里

湯の里や似たる人にもゆきあはず賑ふ中をさ
みしく歩める

黒髪を水藻のごとく浮かせてはいでゆの中に
身をひたし居り

海こえて山越えていざ品川の若葉の色に涙す
われは

電燈の光流るる川添ひのおばしま近くふる小
雨かな

静けさはいでゆの窓ゆ大空の雲より外に動く
ものなし

八月の山の中なる鶯の鳴く音をきけば去年の
おもほゆ

雲低う降りてやうやう廣ごりぬ温泉宿のいら
かの上に

歡樂も悲哀も包む夜の街ただ紅々と灯はかが
やくも

見渡せば灯影賑ふ湯の里や誰が思ひ寐の夢に
入るらし

海の風四國の風もますますにぞ我袂吹きくろ髪
を吹く

風なきて雨少し降る豊の海や雲の中ゆく人ありと思ふ

おもひやれば今か越えゆく瀬戸海のさ霧の中ゆ船渡るめり

海の中靄の中その船の中ただひとり故風の音きく

十坪ほどの湯槽のおもて浪立てりさざ波よする人の移り香

微かなる物のひびきも高鳴りす石の湯殿の深き静寂に

朝の雲夕となれば靄となり街に降りて灯を包むかな

二ときを心のままに許されて往かへりする石
ころの道

星あまた空に並びて歸るさの道のほとりにき
りぎりすなく

あたたかう碧玉の水は身を清め石の湯ぶねを
覗く朝の日

公園の山の暗らさやともしびは遠くきらめく
海の中にも

殻火たく遠近村はたそがれて蛙なきいづ旅は
淋しき

山の上ゆふもとは海とまがふまで白雲ぞ湧く
雨降るらしも

珊瑚珠

わが心きはまりぞなきゆく水の海より海へ空
より空へ

南無歸依佛まかせ奉りし一筋の心としらば救
はせ給へ

南無歸依法後世の菩提もとむらはむ自らの爲
め亡き人のため

南無歸依僧説きて教へて我爲めに還らぬ魂も
かへさせ給へと

ここに逢ひしその佛縁のかしこさも思ふ暇な
く君と語りし

梢渡る風もものいふ静けさに起きてきく夜の
天地のうた

御佛か神かの御手のあまりにも遙けくなりぬ
何をか頼まむ

ふところの念珠いつしかするすると袖にたべ
りつ珊瑚の重み

祈る程足らぬ事あり泣く程の泪はつきず幸あ
る身かな

我爲めの世も末なればせめてこの悲しき事も
身を蓋へところ

生を願ひ死ぬるはあはれ見し人の見るをほり
するわけても悲し

罪として憎みながらも憎み得ず罪罪ならぬ世
にゆかしめよ

恨むべくあまりに我を知りしよりこの淋しさ
ぞわりなかりける

人の世の罪よ科よとおびやかす道よりもやや
離るるなげき

伏姫の犬にてもよし誠あらば身を寄せむとし
思ふ一時

前の世の悪業廻る今宵かも世にあるまじきな
げきをぞする

末法の世に棲むものとなりしかば親のしらざ
るなげきをぞする

女てふ矜もあらずいつしかに變化のものの我
を供養す

何となくおびやかさるる一つ星我魂の棲家な
りけむ

わが命窮りぞなき天地のなかにしあれば尊く
おもほゆ

人の身は神の宮ぞと教へられ神の宮故悲しと
思ひし

生れこぬ昔にかへれ歸らばや我身も魂も昔に
かへれ

うら悲し小甕の花も命ゆゑ日をふるままに凋
み果てぬれ

結縁は花の浄土をさすらひぬ東の間なれど永劫はへぬ

美しき朝の化粧は神のためこの口紅はみ佛のため

みづからの心ながらも尊かる姿寫せば禮拜もする

神も許すこの放埒と誰かいふ歌思ふ間のあやなきころ

忘れまじ今より後は月も花も神の心とうけて死なまし